

廃校施設の活用に対する周辺住民の評価に関する研究

廃校施設の利用の違いが周辺住民の評価に及ぼす影響（その2）

廃校
東京都

用途転用
場所愛着

周辺住民
評価

正会員 ○ 荒木 将行 *
同 小川 遼 **
同 大澤 昭彦 ***
同 大野 隆造 ****

1. 研究目的

前報では、廃校施設の利用状況及び活用計画における地域住民の関与の実態について明らかにした。本報では、廃校施設の利用のされ方が周辺住民にどのような影響を及ぼし、どのような意味を持つかを明らかにすることを目的とする。

2. 廃校施設に対する周辺住民の評価

2-1. 周辺住民に対するアンケート調査の概要

住民アンケート調査では、廃校になった時の心境、建物の存続・解体に対する評価、現在の施設になってからの利用状況、旧学校から変化した項目の評価等について把握した。調査の実施概要と質問概要は〔表1〕の通りである。アンケートは各事例100通ずつ旧学校の敷地の周囲の住民に配布した。

2-2. 廃校及び建物の保存に対する評価

学校が廃校になった時の心境としては、卒業生が家族内にいない回答者（以下【卒なし】）でも「残念と感じる」「少し残念を感じる」割合の合計が67%と高く、特に家族内に卒業生がいる回答者ほど86%と高かった〔図1〕。

また、建物が残されたことへの評価〔図2〕について、利用者限定型、地域開放型、閉鎖型の利用3事例の合計では、どの属性も50%以上が「残されて良かった」「どちらかというに残されて良かった」と回答している。建物が残されることを評価する理由は、回答者自身が卒業生である場合（以下【卒自】）では「母校だから」、「学校があった記憶を残したいから」、「思い入れがあるから」といったように旧学校との関わりに基づく積極的な評価から指摘されているのに対して、【卒なし】では「解体するのはもったいないから」、「周辺環境が変わってほしくないから」と消極的な回答をする割合が高い〔図3〕。しかし、回答者自身が旧学校と関連があったほど「残されて良かった」「どちらかというに残されて良かった」と回答する割合は少なくなっている。この原因は、「建物だけ残ってても母校が残ってるとは言えない。思い出の物がなくなった。」という卒業生のコメントから推察されるように、学校に対する思い入れが大きかった分、現在の建物の利用のされ方に対して違和感をもっていると考えられる。

しかし、建物が解体された解体型において、「建物が解体されたことに対して喪失感を感じたか」という問いに対して、【卒自】の88%が「喪失感を感じた」「どちらかという喪失感を感じた」と回答している〔図4〕。このこ

表1 周辺住民に対して行うアンケート調査の実施概要と質問概要

実施概要	配布方法	戸別に直接訪問し、アンケートを手渡して配布。不在の場合はポストへ投函。	
	回収方法	郵送にて回収。配布した際に記入する場合はインタビュー形式で行う。	
	調査期間	2011年12月下旬	
	回収数 / 配布数	226/500 (100 × 5 事例) < 回収率 45.2% >	
	配布範囲	旧学校敷地の周囲の道路に隣接する住宅	
質問概要	質問項目		回答法
	基本属性	◇居住年数◇小学生以下の子供の有無◇跡地活用計画の参加の有無	SA
	学校との関わり方	◇利用の有無◇利用頻度◇廃校となった時の心情	SA
		◇利用した(しなかった)理由◇学校に対する認識◇廃校となった時に感じた心情の理由	MA
	現在の施設との関わり方	◇廃校となって気づいたことや感じたこと	FA
		◇利用の有無◇利用頻度◇関心の度合いの変化◇周辺環境の変化◇建物が残された事の評価	SA
		◇利用した(しない)理由◇現在の施設に対する認識◇関心の度合いが変化した理由◇周辺環境の具体的な変化について◇建物が残された事の評価理由	MA
		◇建物が残されたことに対する意見、感想◇現在の施設に対する意見、要望	FA

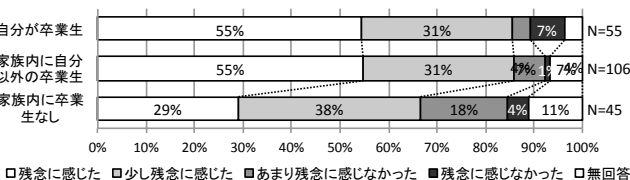


図1 卒業生の有無の違いと廃校になった時の心境の違い（5事例合計）

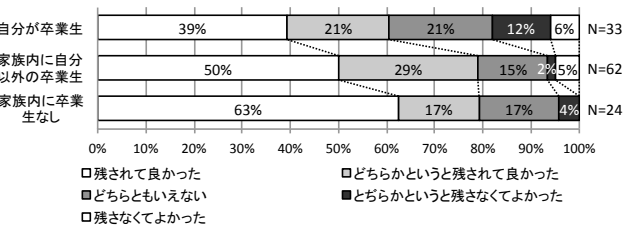


図2 卒業生の有無と建物が残されたことの評価の違い（利用3事例合計）

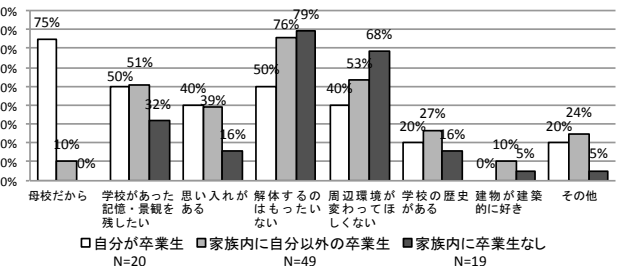


図3 卒業生の有無と建物が残されたことを評価する理由（利用3事例合計）

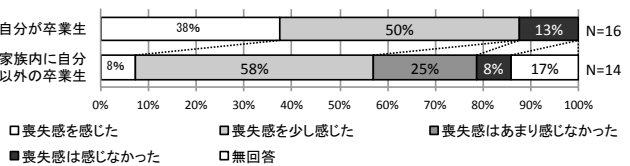


図4 卒業生の有無と建物を残さなかった喪失感の評価の違い

とから、建物を残すことと残さない事では喪失感を緩和する心理的効果に違いがあるとも考えられる。

2-3. 現在の施設の利用状況

どの事例も、現在の施設になってから利用したことがあると約半数が回答しているが、地域開放型と利用者限定型で利用していないと回答した割合に15%と差がある〔図5〕。利用者限定型は、活用計画の際に地域住民が組織を立ち上げて意見を集約した経緯があったにもかかわらず、「施設内容を把握していない」と回答した割合が61%と多い。これは施設内に自由に出入りできるスペースが無いことが影響していると考えられる。

2-4. 旧学校から現在の施設への変化に対する評価

旧学校に対する「防災拠点」、「活気をもたらす」等のそれぞれの評価項目で該当した割合から、現在の施設で該当する評価項目の割合を引いた差を〔図6〕に示す。利用者限定型、地域開放型に関しては、「地域の人達との交流」、「スポーツ・文化活動」の項目で旧学校時と変わらない、もしくはそれ以上の評価を示しており、地域住民のコミュニティ施設として機能していることが伺える。一方で、未利用型に関しては全ての項目で旧学校の評価より低くなっており、未利用がもたらす影響が出たと考えられる。「活気をもたらす」の項目を見ると、閉鎖型以外の他の事例ではいずれも低く評価されているが、閉鎖型は相対的に変化の幅が小さいことから、活気をもたらす効果があると考えられる。しかし、「地域の人達との交流」の項目で他の事例と比べて変化が大きい。広報の充実や地域住民との交流を望むコメントがあったことから、まだ地域との連携が十分に機能していないことが要因と考えられる。

2-4. 現在の施設となってからの周辺環境の変化

閉鎖型は「賑やかになった」「少し賑やかになった」、未利用型、地域開放型、解体型は「静かになった」「少し静かになった」と答える傾向があるが、利用者限定型はどちらともいえない〔図7〕。閉鎖型は具体的に賑やかになって変化した項目として「人通りが多くなった」と100%回答しているが、地域限定型とは異なり「騒がしい環境となった」と回答する割合は20%と低い。未利用型、地域開放型においては、具体的に静かになって変化した項目として「地域の活気が落ちた」「寂しい環境となった」と回答する割合が50%以上と高く、マイナスの評価をしている。活気は跡地活用で求められる要素であると言える。

3. まとめ

旧学校との関わりの違いによって廃校になったときの心境及び建物の保存の評価とその理由が異なることが明らかとなった。また、廃校施設を利用するには地域住民に対して施設内容を周知させ、開放性を高めて地域住民との連携を図る必要があることが示唆された。

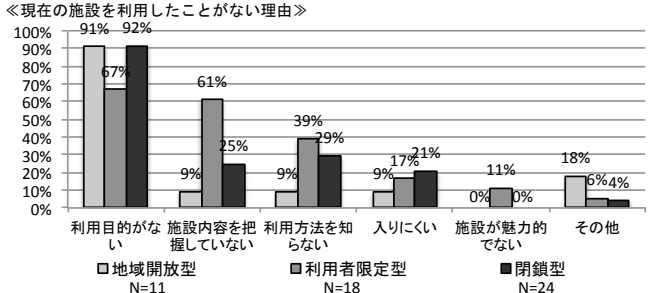
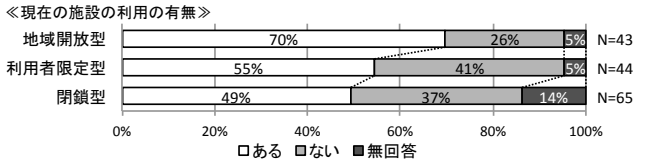


図5 現在の施設の利用の有無と利用したことがない理由

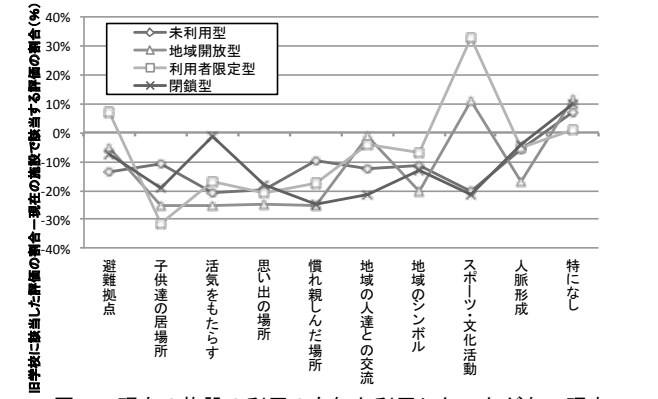


図6 現在の施設の利用の有無と利用したことがない理由

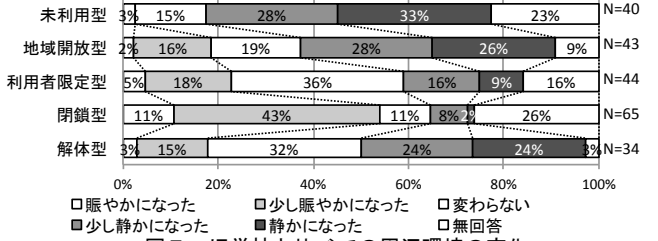


図7 旧学校と比べての周辺環境の変化

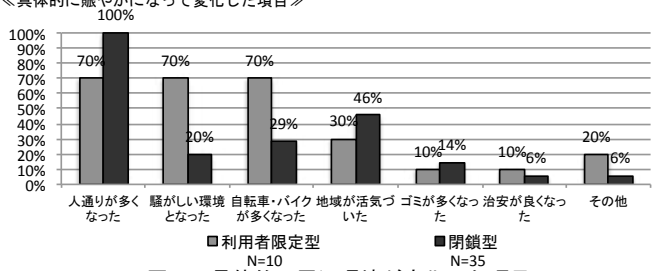
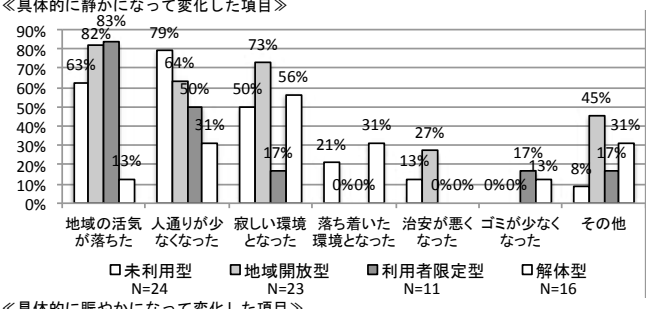


図8 具体的に周辺環境が変化した項目

* 大和ハウス工業株式会社 修士 (工学)
** 東京工業大学大学院総合理工学研究科 修士課程
*** 東京工業大学大学院総合理工学研究科 助手・博士 (工学)
**** 東京工業大学大学院総合理工学研究科 教授・博士 (工学)

* Daiwa House Co.,Ltd.,M.Eng.
** Graduate Student, Tokyo Institute of Technology
*** Research Assoc.,Tokyo Instituvte of Technology,Dr.Eng
**** Prof.,Tokyo Institute of Technology,Dr.Eng